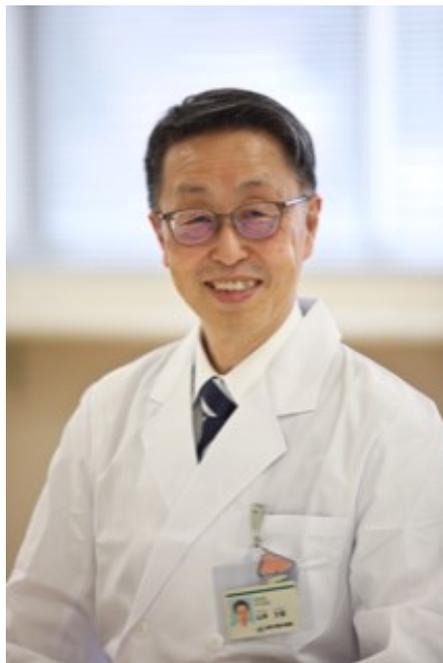


【新潟】働き方改革で「北陸一働きやすい病院に」-山岸文範・糸魚川総合病院院長に聞く◆Vol.2

m3.com地域版

糸魚川総合病院（糸魚川市）は、2021年10月から2022年6月までの9カ月間「働き方改革コンサルティング」を導入し、医療スタッフの問題点解決を図るための活動を行った。医事課チーム、内視鏡チーム、手術室チームの3チームに分かれて施策を行い、業務の無駄を省く「断捨離」をすることで業務効率改善に成功した。具体的な取り組みと成果、今後の目標について、同院長の山岸文範氏に聞いた。（2022年6月22日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



山岸文範氏

——9カ月間、働き方改革に取り組み、内視鏡チームの成果はいかがでしたか。

内視鏡チームは、業務の無駄となっている時間を徹底的に洗い出す作業を行いました。その結果、見えてきたのが「FAXのやり取りに時間がとられる」ということです。これまでは大腸内視鏡検査後に入院が必要になる場合、病棟へFAXを送っていたのですが、実は同時に電子カルテ上の機能を使つての連絡もしていたことがわかりました。つまり2重に連絡をしていたのです。FAXは不要なのでと廃止したところ、看護師の情報伝達の月間作業時間を4時間40分削減することに成功しました。また、院内FAXを廃止して、電子カルテ上の基礎情報システムを活用したことで、メモタックに手書きで書き写していた検査一覧表作成にかかる月間作業時間が84分から8分へ、約10分の1の大幅削減となっています。

さらに、医師のPHS対応に無駄があることにも着目しました。これまでは医師が内視鏡の検査中、病棟から患者さんの対応をどうすべきかと電話があるたびに検査を中断しなければならず、非効率でした。そこで、看護師間でコミュニケーションを取り、医師が内視鏡検査をする時間帯をシェアすることで、検査中の電話を避けられるようになりました。また、検査中に医師がPHSを持つのではなく受付に置いておくことで、もし電話が来たとしても別のスタッフが対応できるようにしたのも業務の効率化につながりましたね。

——手術室チームの取り組みと成果はいかがでしたか。

手術室チームでも業務の無駄を探し減らす作業、いわゆる「断捨離」を意識しました。そこで着目したのが、不要になった手術道具です。在籍数年間の医師がかつて使用していた手術道具がそのまま残っており、手術時に使用しなくともとりあえず用意しておこうというのが習慣となっていました。そうすると、不要な手術道具を用意したり、洗浄したりする手間がかかります。また、手術道具を置くのにも棚のスペースをとりますので、必要な道具が取り出しづらくなります。そこで思い切って不要な手術道具を他病院へ譲ったり、破棄したりしました。すると、棚がスッキリとしましたし、必要な手術道具だけが揃うので効率的に作業できるようになりました。

また、手術に立ち会う看護師の人数も見直しました。平均3人から2.5人に削減したことで、2022年は難易度の高い手術件数が31%増えたにもかかわらず、手術室チームの看護師の平均時間外勤務時間は16%削減の結果となっています。

——「働き方改革」を行うことで得られた一番の成果とはなんですか。

業務の効率化が進んだことが一番の成果ではありますが、その他として医師や看護師たちのチーム間でコミュニケーションを図れるようになったこともうれしい成果です。以前は、それぞれが目の前の業務に忙殺され、お互いの業務負担を心配する余裕さえない状況でした。しかし、働き方改革を実行したことで、確実に変化が起きています。例えば、ある手術室の医師が看護師の仕事負担を心配して、時間外勤務を減らすようにと行動を起こしてくれました。病院全体として、自分の仕事をこなすだけでなく、効率的に業務を行うために他者に配慮するマインドへと変わりつつあることを実感しています。

正直なところ、働き方改革メンバーに選抜され、初めは乗り気ではなかったメンバーもいましたが、チーム間で目標をもって進めるうちに積極的になっていく姿を見られました。結果的には業務の改善を通して仕事の負担が減ったので、達成感に満ちた経験ができたのではと思います。

——業務効率化において失敗したことはありますか。

これまで業務改善の成功例をお話してきましたが、効率化のアイデアが全てうまくいったわけではありません。例えば、内視鏡チームでは「患者さんへの検査の説明を動画にしたい」というアイデアが出ました。しかし、実際のところ患者さんには高齢者が多く、動画での説明は伝わりづらいという壁にぶつかり、実現は難しいことがわかりました。その他にも、いくつもアイデアが生まれましたが、試行錯誤しながらもあきらめた事例はたくさんあります。

——今後の目標を教えてください。

今回、医事課チーム、内視鏡チーム、手術室チームの3チームで働き方改革を行いました。他部署でもぜひ取り組んでいきたいです。特に改善を進めていきたいのは、病棟で働く看護師の業務です。非効率な作業が多いので、効率化できればかなり負担が減ると思います。

このように病院全体の働き方改革を進め、糸魚川総合病院を「北陸一働きやすい病院」にすることが私たちの目標です。そのためにも業務効率化を推進する活動に力を入れていきます。業務の効率化を進めることは、病院で働く人々にとって意義があることです。特に若い医療スタッフであれば、時間の余裕が生まれることで資格取得など勉強する時間に充てられます。人生をより豊かにするため忙しさに埋没するのではなく、輝くようなキャリアを積んでほしいと願っています。

◆山岸 文範（やまぎし・ふみのり）氏

1994年富山医科薬科大学（現富山大学）大学院医学研究科卒業後、糸魚川総合病院で勤務。富山大学第二外科講師、消化器腫瘍総合外科准教授、富山大学附属病院消化器外科診療教授を務めた後、2008年糸魚川総合病院副院長に就任。2021年同病院院長に就任し現在に至る。

【取材・文＝渡辺まりこ（写真は病院提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

